



創設20周年記念シンポジウム
(2009年9月12、13日 於東京外国語大学)

学会長挨拶

20周年記念大会をふりかえって

前田 耕司(早稲田大学)

会員の皆様におかれましては、学期初めで何かとご繁忙な中、全国各地から日本国際教育学会20周年記念大会にご参集いただきまして深く感謝申し上げます。

台湾からは国立暨南国際大学の楊武勳会員をはじめ11名の会員の皆様をお迎えできました。20周年にふさわしい国際的な研究大会になったものと自負しております。また、過日、国立暨南国際大学からは、台湾の学会と共催で国際シンポジウムも視野に入れての研究大会開催のご提案をいただいております。日本国際教育学会の諸活動が国際的にも認知されつつあることの証左といえましょう。

さて、9月12・13日の20周年記念大会の開催に際しましては、大会実行委員長の岡田昭人副会長をはじめ、大会事務局の中島久朱会員および東京外国語大学関係者には多大なご尽力をいただきました。お陰さまで自由研究で44本の研究発表、課題研究とシンポジウムを含めると合計56本の研究発表があり、例年に比べ発表者が大幅に増え盛やかな研究大会となりました。今大会の発表の傾向としては、伝統的な外国語の専門大学である開催校の特徴にふさわしく留学生や外国籍会員の発表がその半数を占め、質疑応答では英語や中国語が飛び交うなど国際教育学会らしさを表出した研究大会になりました。東京外国語大学の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。また、本大会の効果かも知れませんが、会員数も昨年の大会時より41名増えて8月末現在で243名と飛躍的に伸びました。この数字に安堵することなく来年の研究大会までには会員数300名達成を密かに心のマニフェストにして会員獲得に向けて鋭意努力して参りたいと思っております。

本大会が20周年記念事業の重要なイベントであることは申すまでもありませんが、20周年記念事業のもうひとつの柱は20周年記念年報の発行であります。これにつきましては2010年4月に学文社からの発刊を目指し、目下、編集作業に取り組んでおります。表題につきましては、本大会のテーマと連動させ「国際教育学の展開と多文化共生」とし、大会の内容を反映させた年報にしたいと考えております。また、今後は5周年毎の定期刊行物として紀要とともに学会のもう一つの顔として定着させていくことも念頭においております。多くの会員の皆様にご高覧いただき、ご批判ご叱声を賜れば幸甚です。

また、2010年9月の研究大会は牛渡淳・大迫章史の両理事がお引き受け下さり、仙台白百合女子大学での開催となりました。両理事には誠に感謝申し上げます。仙台白百合女子大学には教育系・国際系の学科があり、本学会の研究大会を開催するための好条件が備わっております。また、東北地区には多くの会員がおり、数多くの研鑽を積んだ会員の研究発表も期待できます。仙台大会は次の25周年に向けて新たな一歩を踏み出す意味でも重要な大会です。是非多くの会員の皆様にご参加いただき、研究大会を成功裏に収めますようご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

目次

学会長挨拶	1
創設20周年記念大会報告	2
大会収支報告	3
総会議事録	4
2008年度決算報告	6
2009年度予算案	7
第21回大会のご案内	8
事務局だより	8
紀要『国際教育』第16号原稿募集	10
研究調査エピソード	11
図書紹介・理事会からのお知らせ	12

第20回大会(創設20周年記念大会)報告

実行委員会報告

大会実行委員長 岡田 昭人

大会事務局長 中島 久朱

日本国際教育学会創設20周年記念大会は、秋の気配が感じられる東京外国語大学府中キャンパスにて、「国際教育学の展開と多文化共生」という主題のもと、2009年9月12日(土)、13日(日)に開催されました。本年度の大会テーマには、グローバル化の進行とともに人々が国境を越えて移動する機会がますます増えつつある今日、多民族・多言語からなる生活の場が展開されるコミュニティをいかに創造していくか、根底に「共生」を据え、教育にかかわる学術研究の力をもって多文化社会への貢献を目指す大会に、という願意を込めました。

1日目は午前中に5つの自由研究発表分科会が持たれました。お昼休みに理事会をはさんで午後からはシンポジウム「国際教育学の枠組みと多文化共生」が行われ、日本国際教育学会元会長の西村俊一氏(東京学芸大学名誉教授)、前会長の江原裕美氏(帝京大学)、そして現会長の前田耕司氏(早稲田大学)の3人のパネリストによる講演が行われました。司会は岡田昭人(東京外国語大学)が務め、日本国際教育学会設立の経緯、学問上の諸問題、新しい研究視座などについてのシンポジスト諸氏からの詳細な報告に、会員聴衆一同が熱心に耳を傾けました。同日夜には同大学大会会館にて懇親会が行われました。亀山郁夫東京外国語大学学長の挨拶に始まり、新入会員の紹介や、余興として本学ブラジル研究会のサンバ演奏等もあり、楽しい懇親会となりました。

2日目は午前中に4つの自由研究発表分科会、午後には3つの課題研究として(1)「多文化共生社会におけるコミュニティと国際教育」(発表者:岡田昭人、北脇保之、中島久朱)、(2)「職業教育の日中比較研究」(発表者:石川啓二、志賀幹郎、川下新次郎)、(3)「生涯学力形成のメカニズムに関する比較研究」(発表者:佐藤千津、岩崎正吾、大迫章史)が行われ、それぞれのテーマに沿った内容の発表と議論が行われました。今回の大会は44組の自由研究発表申し込み、両日合わせて延べ100人近くの参加者があり、これまでに無い規模での大会となりました。

これまで、本学会は、会員相互の協力によって学術・教育・研究の進歩発達をはかることを目的として、それぞれの時代の要請に応じた活動により、教育学関連の諸活動において常に主導的な役割を果たして参りました。そして、20周年の節目を迎えた本大会では、国外からも多くの参加者を迎え、また、院生の研究発表も多くあり、本学会の担い手の層が益々厚くなり、研究課題も年々多様になりつつあることを実感致しました。このように変わらぬ探究心とともに成長を続ける日本国際教育学会の姿を目の当たりにし、これまで学会の発展に尽くして来られた歴代の会長、役員の方々をはじめ会員の皆様に改めて感謝の念を表すと共に、21世紀に入りグローバル時代を迎えた世界における国際教育学への期待に応えるべく、本学会の更なる発展を願います。



初めての学会参加



郭 恬(東京外国語大学大学院)

去る2009年9月12、13日、「国際教育学の展開と多文化共生」という主題で、日本国際教育学会創立20周年大会が東京外国語大学府中キャンパスで行われました。

まだ博士後期課程1年生の私にとって、初めての学会参加でしたが、自由研究発表者の一人として参加させていただき、また大会実行委員として準備段階から携わる機会を得られました。創設20周年大会ということもあり、著名な先生方も大勢お見えになって、また参加者数も発表者数も史上最大の規模となったことで、ただただ圧倒され、緊張と興奮の気持ちの中で二日間を過ごしました。

私は自由研究発表分科会にて、中国における日本事情教育について発表させていただきましたが、テーマの近い発表者が集まったことや、会場が適度な大きさであったことによって、緊張しながらも発表を無事終わらせた。質疑応答では活発な討論が行われ、貴重な意見やアドバイスをたくさんいただきました。特に自分とは異なる立場から研究に取り組む方々の意見や考えを聞いたことは、非常に有意義だと感じました。また、記念シンポジウムにおける先生方の講演によって、多文化共生に関わる多様な問題が浮き彫りとなり、自分の研究に関する新たな課題や、新しい知見、ヒントを得ることができました。

今回の大会では、学生会員や海外会員からも多数の参加があり、とても活発で熱気にあふれた雰囲気でした。会場の外や懇親会でも討論が続き、楽しい会話が弾みました。このように創設20周年記念大会に参加させていただき、多くのことを学びました。また微力ながらも大会実行委員として関わる機会を頂けたことに、皆様に深く御礼申し上げます。

日本国際教育学会創設20周年記念大会に参加して

蘇 佩怡 (早稲田大学大学院)

このたび、日本国際教育学会創設20周年記念大会という貴重な機会に参加できましたこと、まことにありがとうございました。今年度の大会は東京外国語大学にて行いまして、テーマは「国際教育学の展開と多文化共生」でした。

国際化が進んでいる一方、教育のあり方にどのような影響をもたらしかという課題を研究者たちの発表から、いろんな視点から自分なりに考察できました。今回の研究対象は東アジア、東南アジアなどアジア系の教育に大幅に注目されていましたことに気がつきました。鳩山政権下の東アジア共同体という目標を達成することで、東アジアや東南アジアに関する教育の研究は重要で不可欠だと感じます。この度、海外にある台湾の国際暨南大学からいらしていた方々が非常に興味深い研究の成果を発表しまして、私にとってとても勉強になりました。特に事務局の方々が同じ自由研究発表の会場で、それぞれ関連する研究発表が行われていたおかげで、私の研究課題に対してより完全な情報が入手できました。このような学会発表という大切な機会を通して、学術交流がもっと活発で有意義なことであります。この場を借りて感謝の気持ちを申し上げます。ありがとうございました。

20周年記念のシンポジウムである「国際教育学の枠組みと多文化共生」にご参加くださいました西村俊一先生、江原裕美先生、前田耕司先生のパネリストによる講演が行われました。国際教育学と多文化共生についての現状や諸研究課題などをも併せて考えさせていただきました。どうもありがとうございました。

大会収支報告

収入		
項目	金額	備考
大会補助金	200000	
大会参加費	240000	3,000 × 80
懇親会参加費	192000	4,000 × 48
弁当代	25000	1,000 × 25
合計	657000	

支出		
項目	金額	備考
施設使用料	25015	会場教室使用料+振込手数料
印刷代	67600	ポスター、チラシ等
発表者謝礼	20000	課題研究発表者1名(非会員)
懇親会費	260000	
備品・消耗品	26101	文房具、紙、ゴミ袋、記章、湯茶接待費等
弁当代	78400	
花代	9000	3,000 × 3(シンポジスト用)
学生アルバイト代	154000	13,000 × 8名(当日手伝い、事前準備)、10,000 × 5名(当日手伝い)
送料	1160	紀要バックナンバー引取り(着払い)
合計	657204	

日本国際教育学会第20回総会議事録

日時:2009年9月12日(土) 16時00分~17時15分
会場:東京外国語大学研究講義棟115教室

議長:吉田尚史会員 楊武勲会員
司会:岩崎正吾事務局長
記録:小林誠事務局長補佐

I. 開会の辞 石川啓二理事

II. 学会長挨拶 前田耕司会長

前田耕司会長より、大会実行委員長以下、実行委員会各位へ感謝と敬意を表すとの挨拶があった。また、台湾から来日された11名の会員を代表して楊会員から挨拶があった。

本大会は、45名の会員の発表があり、例年に比べて大幅に増え、盛会であることが述べられた。また、本学会の新入会員の増加が顕著であり、来年の秋までには会員数300名程度(現会員243名)を目指したいとした。

次回大会開催校である仙台白百合女子大学の牛渡会員に大会を引き受けていただいたことに対し、御礼を述べるとともに、学会員に対しては、大会参加への協力を求めた。

III. 第20回大会実行委員長挨拶

岡田昭人第20回大会実行委員長、中島久朱大会事務局長より、挨拶があった。

IV. 議長選出

岩崎事務局長より、会場に議長選出の諮問があり、学会執行部案として、吉田尚史、楊武勲両会員が推薦され、全会一致で議長に選出された。

審議に先立ち、吉田尚史議長より本総会の定足数と出席者数が報告された。国内在住の正会員155名、学会規約第4条第3項に基づき議決権を有する正会員数102名、出席者と委任状提出者あわせて76名によって、本総会が学会規約第5条第2項に基づき適正に成立していることが宣言された。

議長挨拶 吉田尚史、楊武勲議長

吉田尚史、楊武勲議長から議長就任の挨拶があり、総会出席者に協力を求めた。

I. 報告、承認、決議事項を楊議長、II. 審議事項を吉田議長が進行することが報告された。

I. 報告、承認、決議事項

(1) 2008年度(2008年8月1日~2009年7月31日)事業報告

(i) 2008年度活動報告

楊議長は、上記議案について、岩崎事務局長に報告を求めた。

岩崎事務局長より、配布資料「2008年度活動報告(2008年8月1日~2009年7月31日)」に基づき、理事会(6回)・学会開催(2回)、紀要・ニューズレター発行等、2008年度事業報告がなされた。

(ii) 2008年度決算報告

楊議長は、上記議案について、岩崎事務局長に報告、説明を求めた。

岩崎事務局長は、配布資料「日本国際教育学会2008年度決算報告」に基づいて報告、説明を行った。

支出の部において、以下のような説明があった。

交通費は、事務局幹事の交通費、会合費は、理事会・紀要編集委員会・20周年記念誌準備委員会があったため、予算を超えた。

また、大会開催補助費の項目で、予算を超過した理由は、3回分(第19回秋季、第20回春季、秋季大会)の大会開催補助費の支払いをしたためである。

(iii) 2008年度会計監査報告

楊議長は、会計監査報告について、大庭由子会計監査に報告を求めた。それに伴い、大庭会計監査より2008年度会計報告に相違がないことが報告され、本総会にて承認された。

(iv) 紀要第15号編集委員会報告及び紀要第16号編集方針

楊議長は、上記議案について、平岡さつき紀要編集委員会委員長不在のため、

グレゴリー・プール紀要編集委員会副委員長に報告を求めた。

グレゴリー・プール副委員長は、以下のような説明を行なった。

紀要第15号は、11月発行予定。

紀要第16号について、来年度の大会(9月予定)に合わせて発行するために、紀要

原稿締切を早くする予定(例年は5月上旬)。新たな紀要原稿締切は、紀要編集委員会にて審議中である。締切日決定次第、ウェブサイトおよびニューズレターに掲載する。

(2) 20周年記念年報の発行について

楊議長は、前田記念年報編集委員長に20周年記念年報について説明を求めた。前田編集委員長より以下の通り、説明があった。

20周年記念年報の自由投稿論文の原稿提出締切は、本年9月末日で、来年4月に

学文社より発行予定。後日、20周年記念年報編集委員会(岡田・石川・志賀・佐藤千・岩崎委員)にて、論文の査読を行い、掲載について審議する。20周年記念年報は、本大会の内容を反映する内容となっており、シンポジウムおよび課題研究の報告内容の掲載に加えて、自由研究発表についても論文を公募した。

(3) 選挙管理委員の選任について

楊議長より、選挙管理委員の選任について説明があった。

鴨川明子会員(早稲田大学)、中川康弘会員(首都大学東京)、郭恬会員(東京外国語大学)の3名が理事会案として

推薦され、総会で承認された。

選挙管理委員長は、前総会で承認されている佐藤隆之会員(早稲田大学)であることが確認された。

(4) 特任理事の任命について

楊議長より、前田会長に対して、特任理事の任命についての説明を求めた。前田会長からは、理事会において、牛渡淳会員(仙台白百合女子大学)の特任理事の承認が得られたことの報告があり、牛渡特任理事の紹介がなされた。

(5) その他
なし。

II. 審議事項

(1) 2009年度(2009年8月1日～2010年7月31日)事業計画(案)

- (i) 2009年度活動計画(案)
- (ii) 2009年度予算(案)

吉田尚史議長は、上記二議案について、岩崎事務局長に提案趣旨説明を求めた。

岩崎事務局長は、配布資料「日本国際教育学会2009年度(2009年8月1日～2010年7月31日)活動計画(案)」および「日本国際教育学会2009年度予算案」に基づき、上記議案について提案内容と趣旨の説明を行った。

活動計画においては、学会の組織、財政、研究活動、広報活動等の説明がなされた。特に、学会員の増加を図り、学会活動の一層の充実を期する点が確認された。

予算案においては、収入および支出の部は例年と変わらず、25周年記念企画積立金を新たに設け、5万円ずつ積み立てることが報告された。

吉田議長は、上記二案について、一括して質疑を行い、採決された。全ての議案について、原案通りに可決された。

(2) 学会規則等の改正について吉田議長は、

上記審議議案について、大迫章史理事に議題提案を求めた。それに伴い、大迫理事は、学会規則等の改正についての説明を行なった。

日本国際教育学会学会規則第6条8)に、役員及び役員会について、以下の改正案を提案する。

(現行規定)

第6条 役員及び役員会

8) 学会事務局(事務局長1名、事務局次長、事務局長補佐若干名)

事務局長及び事務局次長、事務局長補佐は会長によって正会員の中から任命され、任期は会長の在任期間とする。事務局長及び事務局次長補佐は、理事会に臨席することができる。会長及び副会長は、事務局長、事務局次長及び紀要編集幹事と共に学会事務局を構成し、本会運営のための実務遂行に当たる。学会事務局の設置場所は、会長がこれを定める。

(新規定)

第6条 役員及び役員会

8) 学会事務局(事務局長1名、事務局次長、事務局幹事若干名)

事務局長及び事務局次長、事務局幹事は会長によって正会員の中から任命され、任期は会長の在任期間とする。事務局長及び事務局次長、事務局幹事は、理事会に臨席することができる。会長及び副会長は、事務局長、事務局次長、事務局幹事及び紀要編集幹事と共に学会事務局を構成し、本会運営のための実務遂行に当たる。学会事務局の設置場所は、会長がこれを定める。

附則3 本改正案は2009年9月12日開催の総会終了後より施行する。

(理由)

学会事務局役職の名称に関して他学会との整合性をもたせ、あわせて学会事務局による本会運営のための実務の円滑な遂行を図るため。

吉田議長は、上記の議案について、総会出席者に諮った。その結果、全会一致で承認された。また、学会規則の第9条の規定により、本規則の改正・実施にあたっては、全正会員の3分の2以上の賛成が必要のため、ニュースレターにおいて、規則改正の異議等を全会員に求め、承諾された結果、実施することとなった。

(3) 春季研究大会の開催について

吉田議長は、春季研究大会について前田会長に説明を求めた。前田会長より春季研究大会について、以前に行われていた春季研究会に変更したいとの提案があった。

提案理由としては、若手研究者がそれぞれの研究課題について意見交換や討論を十分に行なう時間を確保するとともに研究業績を作るため、大会を発展的に改組して研究会にすることが説明された。

さらに、春季研究会において、優れた発表には、研究ノート(案)として紀要掲載を検討することも提案された。詳細については、ニュースレターにおいて、研究会内容を掲載し、会員に情報提供することとし、また、5年ごとの記念年報発行に関連して、春季大会の予算を記念年報発行予算に充当することについても提案があった。

総会出席者への質疑応答を経て、上記提案は原案通りに承認された。

(4) 第21回大会の開催校について

吉田議長より、2010年秋季研究大会開催予定校は仙台白百合女子大学であることが報告され、承認が得られた。

(5) その他
なし。

議長降壇

吉田尚史、楊武勲両議長は本総会の円滑な議事進行への協力に対して感謝の意を表し、降壇した。

閉会の辞 牛渡淳特任理事

次回大会開催校、仙台白百合女子大学の牛渡特任理事より、挨拶があり、本総会は閉会した。

日本国際教育学会 2008年度(20期)決算報告
(2008年8月1日から2009年7月31日)

収入の部

費目	予算	決算	備考
前年度繰越金	1,394,645	1,394,645	
会費	900,000	839,000	正会員87万5千円、学生会員14万円、賛助会員1万4千円
利子	10	539	
紀要販売	60,000	40,000	新刊10冊 既刊10冊
寄付金	0	0	
雑収入	0	45,819	大会開催補助費返還金45219円を含む
合計	2,354,655	2,320,003	

支出の部

費目	予算	決算	備考
交通費	5,000	42,000	発送作業・会計監査
消耗費	40,000	56,018	封筒・切手・用紙代など
郵送料	100,000	65,650	紀要発送・メール便代など
会合費	40,000	88,159	理事会・紀要編集委員会弁当代
大会開催補助費	150,000	400,000	第19回秋季・20回春・秋季大会補助費
庶務費	60,000	43,581	コピー・手数料代
印刷費	550,000	388,679	紀要・ニュースレターなど
予備費	50,000	0	
謝礼費	0	0	講演料
次年度繰越金	1,309,655	1,185,936	
20周年積立金	50,000	50,000	
合計	2,354,655	2,320,003	

20周年記念積立金

費目	予算	決算
前年度繰越金	200,000	200,000
今年度積立金	50,000	50,000
合計	250,000	250,000

次年度繰越金(収入-支出分)

	金額
郵便局【普通】	44,480
郵便局【会費納入用】	1,050,408
銀行【普通】	88,808
現金	2,262
合計	1,185,936

上記の通り報告致します。

2009年8月20日

事務局長

岩崎正徳

監査の結果、正確であったことを認めます。

2009年8月20日

会計監査

大庭由

2009年8月20日

会計監査

渡辺幸倫

日本国際教育学会 2009年度(21期)予算案
(期間 2009年8月1日から2010年7月31日)

収入の部

費目	予算	詳細
前年度繰越金	1185936	
会費	900000	正会員 10000×70口 学生会員 5000×40口
利子	10	郵便貯金利子
紀要販売	60000	機関・個人購読 3000×20口
寄付金	0	
雑収入	0	
収入合計	2145946	

支出の部

費目	予算	詳細
交通費	5000	発送作業・会計監査交通費
消耗品費	40000	封筒・切手・用紙代など
郵送費	100000	紀要発送・メール便代など
会合費	40000	理事会・紀要編集委員会弁当代
大会開催補助費	150000	大会開催補助費
庶務費	60000	コピー・手数料代
印刷費	550000	紀要・ニューズレターなど
予備費	50000	
次年度繰越金	1100946	
25周年記念企画積立金	50000	
支出合計	2145946	

20周年記念企画積立金

前年度繰越金	250000	2004年～2008年度の5年度分
--------	--------	-------------------

日本国際教育学会第21回大会のご案内

1. 実行委員会からのごあいさつ

大会実行委員長 牛渡 淳
大会事務局長 大迫 章史

このたび、日本国際教育学会第21回大会を仙台白百合女子大学で開催させて頂くこととなりました。大会開催にあたりまして、ご挨拶申し上げます。

教育における国際化、グローバル化は国際教育の重要なテーマであり、これまでさまざまな場面で主張されてきました。とくに近年では、OECD(経済開発協力機構)によるPISA調査(生徒の学習到達度調査)などをおして、世界標準の学力の形成が目指されています。そして、PISA調査結果をめぐって、参加国の多くで学力に関する論議、ひいては教育全般についての論議がさかんになっています。このような動きを背景として、国際教育研究の重要性、そして今後求められる役割がますます大きくなっていることは間違いありません。

このような時期に、本学において日本国際教育学会の大会を開催させて頂けることを誠に光栄に感じております。

開催校となります仙台白百合女子大学は、フランスのシャトルル聖パウロ修道女会を設立母体としております。本修道女会は、日本のみならず、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカで社会福祉、医療、教育等の分野での活動を展開しており、これらは国際的なネットワークとして確立しております。このような活動に照らしましても、日本国際教育学会を本学で開催させて頂く意義は大変に大きいと感じております。

第21回の大会準備委員会は、本学における会員のみならず、仙台を中心に東北地方の会員に加わって頂き、組織する予定です。そして、今回の開催を機として、東北地方における本学会会員の拡大にも寄与できればと願っているところです。

11月の仙台は、紅葉の秋、味覚の秋であり、1年の中でも大変によい季節です。多くの会員の皆さまにご参加頂き、満足して頂ける大会となるよう、大会準備委員会では来年11月の開催に向けて1年間しっかりと準備していきたいと考えております。会員の皆さまにおかれましてもご協力よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、第21回大会で皆さまにお会いできますことを楽しみにしております。

2. 大会時期: 2010年9月(予定) 詳細につきましては、追って学会webサイトでお知らせ致します。

3. 会場: 仙台白百合女子大学 宮城県仙台市泉区本田町6番1号

4. 問い合わせ先: 大迫 章史 (TEL:022-372-3254 / FAX:022-375-4343, E-MAIL:ohsako@sendai-shirayuri.ac.jp)

事務局だより

1. 連絡先・ご所属変更をお知らせ下さい。

4月からの新年度を迎え、所属変更にともない会員資格に変更がある方、連絡先が変更になる方がおられましたら、事務局長までメール(siwasaki@tmu.ac.jp)にてご一報下さい。

2. 寄贈文献一覧

学会に寄贈いただきました書籍・刊行物を紹介いたします。

- ① 鴨川明子(2008)『マレーシア青年期女性の進路形成』東信堂。(2008年度)
- ② 山崎直也(2009)『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂。(2008年度)

3. 新入会員紹介

2008年度第4回(2009年2月7日開催)、第5回(2009年4月25日開催)、第6回(2009年度7月11日開催)、2009年度第1回(2009年9月12日開催)の常任理事会で入会を承認された新入会員をご紹介します。(次頁参照)

新入会員一覧

氏名	所属	会員種別	国籍
田中 達也	大阪市立大学大学院	学生正会員	日本
斎藤 真	中部大学	正会員	日本
董 怡汝	愛知学院大学大学院	学生正会員	台湾
孫 秀萍	首都大学東京大学院	学生正会員	中国
田中 真奈美	東京未来大学	正会員	日本
渡部 孝子	群馬大学	正会員	日本
呉 緑霜	仰恩大学	正会員	台湾
Mock John	Temple University Japan	正会員	アメリカ
B.M.Pritantha Rathanayaka	首都大学東京大学院	正会員	スリランカ
嶋内 佐絵	早稲田大学大学院	学生正会員	日本
栗栖 淳	国土館大学	正会員	日本
松岡 洋子	岩手大学	正会員	日本
中室 牧子	コロンビア大学大学院	学生正会員	日本
伊藤 直哉	国立暨南国際大学大学院	学生正会員	日本
許 瑞蘭	国立暨南国際大学大学院	学生正会員	台湾
林 韋伶	早稲田大学大学院	学生正会員	台湾
土屋 千尋	帝京大学	正会員	日本
金 賢娥	東京外国語大学大学院	学生正会員	韓国
謝 琬如	国立暨南国際大学大学院	学生正会員	台湾
呉 玟晏	国立暨南国際大学大学院	学生正会員	台湾
呉 世蓮	早稲田大学大学院	学生正会員	韓国
Anne Welle-Strands	Norwegian School of Management BI	正会員	ノルウェー
Arild Tjeldvoll	National Chi Nan University	正会員	ノルウェー
Gary Vore	National Chi Nan University	正会員	台湾
郭 恬	東京外国語大学大学院	学生正会員	中国
孫 儀	早稲田大学大学院	学生正会員	中国
宮本 美能	足立区教育委員会	正会員	日本
黄 悦仔	国立暨南国際大学大学院	学生正会員	台湾
松田 知香	東京外国語大学大学院	学生正会員	日本
尹 智鉉	早稲田大学	正会員	韓国
日比野 正明	環太平洋大学	正会員	日本
高尾 淳子	愛知教育大学大学院	学生正会員	日本
牛渡 淳	仙台白百合女子大学	正会員	日本
邱 靖雯	台湾国立暨南国際大学大学院	学生正会員	台湾
張 曉菁	台湾台北金龍小学校付属幼稚園	正会員	台湾
坂口 千恵	千葉大学大学院	学生正会員	日本
堀口 佐知子	上智大学一般外国語センター	正会員	日本
平山 雄大	早稲田大学大学院	学生正会員	日本
井本 由紀	慶応義塾大学	正会員	日本
許 之威	京都大学大学院	学生正会員	台湾
中川 康弘	首都大学東京大学院	学生正会員	日本

日本国際教育学会紀要『国際教育』第16号投稿要領

日本国際教育学会紀要編集委員会では『国際教育』第16号の発刊に際し、自由投稿論文、研究ノート、調査報告、教育情報、資料紹介を募集いたします(2010年3月1日消印有効)。投稿希望の会員は、下記の要領にしたがって投稿して下さい。

例年より期限が早まっておりますので、投稿をご予定の会員各位におかれましては、ご注意下さいますよう、お願いいたします。

1. 投稿要領(論文・その他)

- (1) 投稿資格は、日本国際教育学会の会員に限られる。投稿に際して、入会審査が完了していること、当該年度の会費を完納していることが投稿の条件となる。
- (2) 論文のテーマは日本国際教育学会活動の趣旨に沿うものとする。
- (3) 掲載論文は、口頭発表の場合を除き、未発表のものに限る。
- (4) 使用言語は、日本語、英語、中国語のいずれかとする。
- (5) ①原稿は、全て図や表、脚注を含めて横書き、ワープロ書き、10.5ポイントとし、A4版を使用することとする。
②和文、中文は、1行40字×40行(1,600字)で印字する。英文はダブル・スペース22行とする。
③執筆量は、以下の表の通りとする。

また、英文原稿はAmerican Psychological Association's Manual of Style, 4th Edition に準拠する。

投稿原稿の別	概要	ページ数制限
論文 (Research Paper)	国際教育に関する理論的知見を伴う研究成果など	和文17.5ページ以内 英文40ページ以内 中文10ページ以内
研究ノート (Research Note)	論文に準じ、断片的に得られた研究成果、調査成果など	和文5ページ以内 英文15ページ以内 中文3ページ以内
調査報告 (Research Report)	国際教育に関する調査の報告など	
教育情報 (Research Information)	国際教育の参考になるような研究・実践・政策に関する情報など	
資料紹介 (Data)	国際教育の参考になるような資料の紹介	

④題目は12ポイントとし、日本語・中国語の場合は副題も含めて30文字以内、英語の場合は15 words以内とする。

- (6) 投稿原稿には和文論文には英語500語以内の要旨、英語・中国語論文には日本語の要旨(A4版×1枚程度。字数は(5)に準拠する)を添付し、原稿と要旨を各3部(うち2部は複写、匿名とする)提出する。
- (7) 投稿原稿は2010年3月1日(消印有効)までに、紀要編集委員会事務局宛に提出するものとする。投稿原稿は、紀要編集委員会において審査を行い、採択、修正再審査、不採択が決定され、投稿者に通知される。修正再審査の場合、定められた期間内での原稿の修正の権利が与えられる。なお、採用原稿に関しては原稿(ハードコピー)とともに電子ファイル原稿(英文要旨を含む)も、CD-Rに保存の上、提出すること。

2. 問い合わせ先・原稿送付先

日本国際教育学会紀要編集委員会
〒379-2192 群馬県前橋市小屋原町1154-4
共愛学園前橋国際大学 平岡さつき研究室 気付
TEL: 027-266-7575(代表)
FAX: 027-266-7576(平岡さつき宛)
E-mail: hiraoka@c.kyoai.ac.jp

ADDITIONAL GUIDELINES FOR ENGLISH MANUSCRIPTS
CALL FOR PAPERS: JOURNAL of INTERNATIONAL EDUCATION, Volume 16

Submissions to the 16th edition of Journal of International Education are now being accepted, with a deadline of March 1st, 2010. Authors making submissions in English should review these guidelines:

1. Manuscripts include research articles and research notes, which must be the original work of the author(s).
2. Papers should be double spaced, submitted on A4-size paper, contain twenty-two lines per page, and be no longer than forty pages in total length. Margins on the top, bottom, and sides should be no shorter than 2.5 centimeters (i.e., one inch).
3. For general guidelines on appropriate style and format, please refer to the Publication Manual of the American Psychological Association. Example:
Smith, J. (2000). The educational challenges of the new century. New York: Broadway Publishing.
Pavil,S.(1997). Capitalizing on cultural capital :The movement of knowledge through corporations. Harvard Business Journal, 14 (1), 654-675.

4. Three copies should be submitted to the Editorial Committee for review. One copy should include the author's name, address, institutional affiliation, and phone number on the cover, and the other two should include only the title in order to maintain the author's anonymity. An Electronic version should also be included.
5. All English manuscripts must include a Japanese abstract that is one page in length (A4 size).
6. All manuscripts will be accepted without revisions; accepted conditionally, with stipulations for more revisions; or rejected. In the case of conditional acceptance, the Editorial Committee reserves the right to reject a manuscript after revisions have been made if revisions are deemed insufficient. Once the manuscript was accepted for the publication, author should submit the electronic version (including Japanese abstract).
7. Authors for whom English is a foreign language are recommended to have their manuscripts carefully proofread by a native speaker of English before submitting the paper. Writers who submit manuscripts that have so many English mistakes so as to make the content indecipherable risk having their papers rejected. Electronic versions of manuscripts will not be accepted.

Please send all submissions by regular post to
 Ms. Satsuki Hiraoka
 Maebashi Kyoai Gakuen College, 1154-4 Koyahara-machi, Maebashi-shi, Gumma, 379-2192 Japan
 Inquiries about the journal may be directed to Ms. Hiraoka by telephone at
 +81-27-266-7575 or E-mail at hiraoka@c.kyoai.ac.jp

研究調査エピソード

台湾の日本統治時代の教育関係史料について

鄭 任智(早稲田大学非常勤)

日本国際教育学会の研究大会では、筆者は主に台湾の日本統治時代(1895~1945)の教育、とりわけ台湾の郷土文化に関する郷土教育について何回か発表した。以下少しこのテーマの研究動機について述べる。戦後、中国から来て台湾を軍事的に接収することになった国民党政権は、台湾を効率的に統治するため、真っ先に推進したのは北京語という「國語」を言語同化の手段とした「國語運動」政策である。あたかも終戦する直前まで台湾の統治国であった日本がかつて推進した國語普及活動を彷彿とさせる(ただし、日本統治時代の「國語」というのは日本語であった)。その後発布された戒厳令により、台湾では強力な思想統制と独裁的・抑圧的統治体制が布かれ、「中国人に同化させる」という同化政策の一環として言語政策では「國語独尊」が採られていた。これにより「國語」と呼ばれる北京語の言語教育、また北京語による教育だけが許され、他のエスニック・グループの母語は全て方言として扱われ、それらの言語に対しては何ら施策が行われない上、その教育を行うことも禁止した。こうした國語運動政策の推進によって1999年の調査結果では、原住民と客家族の大学生が自分の母語を理解・使用できない割合はそれぞれ40%、22%を超え、また客家語は毎年5%という速度で失われつつあると報告されている。1980年代に初等教育と中等教育を受けていた筆者は福佬語話者としてこうした強力な同化要請である國語運動による母語の消失、またそれに伴う文化(母語による文化または郷土文化)の消失に憂慮をしていた。

1987年、こうした抑圧的な同化政策は戒厳令解除と共に緩和され、政治的解禁と伴って民衆は自由に団体や政党を結成できるようになり、教育においては台湾の本土文化振興ブームが起こり、それまでの強制同化が多文化・多文化化する方向へと向かうようになった。その中、母語教育政策の客観的環境が形成され、最終的に「郷土言語」という名の下に母語教育政策の制定・実施にまで漕ぎ着くことになった。具体的な例として、1994年に正規の教科目として小學校に「郷土教學活動」、中學校に「郷土藝術活動」と「認識台湾」の3教科が導入されたことが挙げられる。しかし、郷土教育は国民党政府が台湾に来る前の日本統治時代には既に行われていたため、台湾における郷土教育の起源を遡りたく、日本統治時代の郷土教育について研究し始めた。ただし、こうした歴史関係ないし教育史に関わる研究は、関連研究の発表や最新史料の発見などの動きに対して注意を払わなければならない。その中でも一次史料の確保が大変重要である。そこで今年の研究大会の発表のための一次史料を確保するため、8月上旬に台湾史関連史料が最も豊富だと言われている「国家中央図書館台湾分館」を訪れた。

国家中央図書館台湾分館は、日本統治時代の「台湾総督府図書館」がその前身で、台湾で最も長い歴史を持っている公立図書館である。1914年4月に勅令第62号台湾総督府図書館官制が公布され、同年11月に艋舺(現在の萬華)にあった清水祖師廟に臨時事務所が設立された。翌1915年8月より正式に對外業務を開始した。1945年の終戦になると、台湾総督府図書館も国民党政府に接収されることになった。その後他館との統合や管轄の変更などを経て、1973年7月に行政院(日本の内閣に相当)下の教育課に移管され、館名を国立中央図書館台湾分館とされ、現在に至ったのである。なお、2004年9月に場所は台北県中和市新安街4号公園の敷地内に移転され、最寄り駅は台北MRT南勢角線の永安市場駅である。筆者はそこで日本統治時代の修身科や地理科、歴史科などの教科書、青年団や地域団体の報告書などに実際に触れ、当時行われた初等教育と社会教育の内実を探ろうとしていた。国家中央図書館台湾分館には「児童用資料センター」や「雑誌期別室」、「閲覧室」、「視聴覚室」などが設けられているが、特筆すべきは2007年に「台湾学研究センター」の設置である。台湾では1990年代の民主化まで台湾に関する研究(Taiwan study)は殆どなされていなかったため、台湾本土に関する研究はほぼ外国でしか見られなかった。こうした「台湾学研究センター」の設置は、遂に自ら生活している場所(郷土)に対する研究ができるようになったことを意味する。

国家中央図書館台湾分館には台湾を研究するための文献が大量に収蔵されている。学術研究の利用だけでなく、一般市民にも公開しているため、社会教育の普及活動も行われているのである。台湾のことや台湾の教育史に興味を持っている会員はこうした蔵書が豊富な図書館を是非訪れて欲しい。

図書紹介

藤森弘子・花蘭悟・楠本徹也・宮城徹・鈴木智美・編 『日本語教育学研究への展望：柏崎雅世教授退職記念論集』
ひつじ書房、2009年。

本書は東京外国語大学留学生日本語教育センターに長年勤務された柏崎雅世氏の退職を記念して、東京外国語大学留学生日本語教育センターを中心とした留学生教育・日本語教育研究を専門とする専任教員、ならびに東京外国語大学大学院の日本語教育学専修コース修士課程の修了者による論文集である。

全部で27の論文は、すべて日本語教育についてまとめられた論文であり、内容によって4つの章に分けられ、「やばい」の意味や、オノマトペなど日本語の音声・語彙・文字について日本語教育への示唆を与える第一章、状態動詞、比較表現、命令・依頼文など文法的側面に焦点を当てた第二章、ターンの共同的構築、話題開始、スピーチレベルなど日本語学習者を含む会話を分析した第三章、言語そのものというより日本語教育実践のほうに焦点を当てた、オーストラリアの日本語アシスタント、現代日本の留学生受け入れ政策、参加型の日本語教授法などについてまとめられた第四章から成り立っている。そして最後に東京外国語大学留学生日本語教育センターの歩みと柏崎雅世氏からのことばで締めくくられている。

上記の4つの章の内容の多岐・幅広さからわかるように、まさに先生の退職を記念して日本語教育研究に従事する者の近年の研究成果が一堂に会したといったようである。冒頭の論文で姫野昌子氏が述べているように、まだ日本語教育関係の本が少なく、手書きの教科書を使っていた1970年代初めの当センター発足当時と比べて、はるかに研究領域が多様化した日本語教育のあり方が見えるようである。国際社会での日本の地位の高まりと共に日本語学習者は増えるであろうが、多様な観点から研究が進められることによって日本語を学ぶものの多様なニーズにこたえられるような研究となることを望む。(松田 知香 東京外国語大学大学院)

理事会からのお知らせ

1. 2009年度春期研究会について

2009年度春期研究会を2010年3月下旬に開催します。

会場：相模女子大学

日程：2010年3月下旬(予定)

詳細は、追って学会webサイトで告知致します。

2. 国際シンポジウムのお知らせ

台湾国立暨南国際大学比較教育学系と中華民国比較教育学会により開催されるシンポジウムへの協賛が決定しました。

会場：台湾国立暨南国際大学

日程：2010年5月1日(土)(予定)

詳細は、追って学会webサイトで告知致します。

日本国際教育学会 Newsletter No.21

編集発行：日本国際教育学会 代表 前田耕司

<http://www.soc.nii.ac.jp/jies/>

発行所：〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京都市教養学部人文社会系

岩崎正吾研究室気付

TEL: 042-677-2085(直通)

FAX: 042-677-2083(教育学教室)

E-mail: siwasaki@tmu.ac.jp

発行年月日：2009年12月20日